

私が住んでいた村は今、居住制限区域に
 なっています。帰ることはできません、住むこと
 はできません。村です。私は、その村^{から}帰るとき、
 みんなどうするかを考えてみました。
 私の祖母は見守り隊をしています。祖父は
 除染の仕事です。このように村の人は復興へ
 の想いが強いのです。でも、その村の人とい
 うのは、だいたいがお年寄りの方々です。若
 い人達は、大震災で汚染された村に帰って
 来いよと言われてたとき帰るのでもうか。
 私は帰らななと思えます。なぜなら今、生活
 面で不便なことが多にからず。スーパーや
 病院、学校などがすぐ活動するからならない
 今は、避難した場所で生活する方が良くな
 っているのです。

ぼくは、東日本大震災にあいました。ぼく
 は、3月11日のかえりにあのじしんがありま
 した。ぼあちゃんとおるいてゐるときにじし
 んがあり、近くにでんちゅうがあつたのでま
 けました。そして家についたらじいちゃんか
 ことばでてまいました。次に草野のおじい
 ちゃんおばあちゃん家に行きました。そしたら
 ら、2こくらいしか物があつたのでま
 っくりしました。母の家は、ほりこたつた
 ったのでまかつたです。なん日かたつたとき
 ぼくとおねえちゃんとおんちゃんが草野のお
 じいちゃんとおばあちゃん家に行きました。
 そしたらいてことがまいてひらぐりしました。
 その数日後、みんなと東京のおじいさんの家
 に行きました。東京のお店でかい物をしていて
 車にのらうとしたら、「がんばってくださ
 い」といわれてうれしかつたです。そのあと、
 びんをまら、てうれしかつたです。

ぼくは、飯館村で飯櫃小学校にかよって
 いました。東日本大震災が始まったのはぼく達
 がふつうに生活しているときでした。学校か
 ら帰ってきてつくって宿題をやっているこ
 とつせ人地震警報が家になりひびきました。
 すると地面が大きくゆれて、ぼくは危ない、
 と思って兄弟とこたつの中へかくれました。
 少し地震がおさまったと窓外に出てみると
 屋根のかわらかおちて割れていたり、して
 すごくこわくなりました。テレビが見れない
 ので周りのことが全然分からなくてどこらへ
 ンまで被害が広がったのかが分かりませんでした。
 少しして、テレビが見れるようになったとき
 ニュースでこの地震でたくさんの方が亡くな
 ったと知り、そこで初めて地震とはおそろしいも
 のだなと思いました。

なので違うところへ避難した人達もいるの
 で、1日も早く復興をして、1日でも早く、また
 みんなで前と同じ暮らしをしたいです。

154 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 高橋 栄美

私は、3月11日の地震の時、バスに乗って
いました。その時まだ二年生でした。バスの
中でもすぐ分かるほど大きい揺れでした。

家に着くと屋根にあるはずのカワラが地面
に落ちていて、私はその時なぜかなみだかこ
ぼれました。いろいろな感情がおふれ出てし
ま。たのかなと思います。

何日かた。て、会津に行きました。そこで
いとことい。しょに家を借りて住んでいまし
た。前とはちがって、スペースが小さくて大
変でした。ベッドもないのでみんなを並んで
ねていました。

今は、川俣にひ。こしてなんとかおちつい
たけど、もうあんな経験はしたくないです。

3月11日に川俣の歯医者さんにおかっ
てい
ました。その途中に、すごく大きい地しんに
あいました。すごくこわりおもいをしました。
何時間もかけて、自分の家に帰ることができ
ました。余しんは、たくさんなりました。夕
方になり寒くなつて、電気もつかないし、電
話もつながらないので父との連絡がとれなく
て、心配していました。家では、こたつがす
みでおこすものだったので、寒くても暖はと
れました。余しんがあつて、ねむることもで
きませんでした。何の情報も入ってこなくて、
すごく不安でした。夜中に、父が帰ってきた
ので、ほつとしました。父は、東京電カが爆
発するかもしれないと言っていました。でも、
2年生だったので、何のことだか分かりませ
んでした。ラジオで、ひなんしないと危険だ
と聞き、南相馬市のいとこと一緒にひなんし
ました。今だに、自分の家には、帰ることが
できません。だけど、除染をしてもらい自分
の家に行けるようになることを願っています。

東日本大震災が起きたとき私は、お母さんと、買い物にきていました。お父さんは、仕事でいなくて1番目のお姉ちゃんは、福島に住んでいました。2番目のお姉ちゃんは、テストで早く帰ってきていました。

そのとき、買い物をしているとき、お店の中が強くゆれました。私は、とてもこわかった。周りのお酒が次々にたおれていきました。私は、お母さんと外に出ました。その瞬間かん私は、心の中で世界がおわってしまふんだと思いました。お母さんと私は、いそいで家に帰りました。家の中はぐちゃぐちゃでした。私は、何が起きたのかわからなくて泣いてしまいました。とても、こわい体験をしたなと思いました。お父さんも帰ってこれてよかったです。もう、こんなつらい体験は、したくないです。

15 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 高橋 優人

ぼくが二年生の終わりに東日本大しん
 災がおきました。そのときぼくは、学童ほ
 うくにいました。宿題をやろうとした時、「グ
 ラッ」ときて花かんがゆれてみんなを外にだけ
 ました。さらに校庭にひなんしました。入ひ
 すやと言う店の後にある虫の一部かくおれて
 ました。先生たちは、ブルーシートを持っ
 てきてくれてそのブルーシートでみんなをか
 こってくれました。自分は、ものすごくこの
 川と思えました。その後ひなんになり支援を
 たくさんしていただきとてもありがたかったです。
 ぼくも、たくさん勉強して助けたく
 れた人たちに恩返しをしたと思います。
 今もまたひなんはつづいてます。友達と
 もぼりぼりになつて川のそばで友達といっ
 しょに勉強したり遊ぶたいです。

158 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 細川 結衣

東日本大震災の影響で私たちは飯館村から
 福島市によぎなく避難しました。地震がおき
 た日は電気がつかなか、たのぞうそくを机
 の上に置いてご飯を食べました。寝るときは
 車の中で寝ました。避難のとき犬は連れてい
 けなか、たのぞう犬は飯館村の家においていき
 ました。餌やりをやるためお母さんやお父さ
 ん、じいちゃんが福島から飯館まで餌をあげ
 にいってました。それに、放射線の影響で
 なかなか飯館村に行けませんでした。友達も
 何人か他の小学校に転校してしまいほとんど
 会わなくなってしまうました。私は早く放射
 線がなくなり前みたい生活しやすい村にも
 どってほしいと思います。そして、皆が笑っ
 て仲良く平和にくらせればいいと願います。
 東京電力や他の会社がこれ以上放射線や被害
 を広げずに復興がすすむばいいと思います。

東日本大震災を体験して、ぼくは、その時
小学校二年生でした。

「最初は、地面がゆれていて、なにがおきた
のかなあと、ふしぎでいました。

けれど家に帰ると、屋根がこわれていて、
これは、さき地面がゆれていたときになっ
たのかなあと、思いました。

次に夜になって、空のせいではなくて、車の
中で寝ることになって、これは、大人は、体
験しているのだなあと、思いました。

そして、学校にも行けなかつたし、学校が壊
ま、たと思つたら、友達が何人かなくなつて
しまったので、悲しかったのだと、思いました。

最後に復興への想いは、早く放射線をなく
して、もう、飯樋小学校に、どりたいたいところ
が。

160 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 渡部 勇斗

ぼくは、震災があった日の夜、明かりのな
い家でぬきました。なにも見えなくてこわが
たです。

次の日、ひなん所にいきました。ひなん所
では、ゲームをしていました。けれど、とこ
も下をでした。でも、ひなん所のテレビがの
いたときはとてもうれしかったです。そして
その日の夜に秋田にいきました。そして、近
秋田の学校に通ったあと飯樋小学校にもどっ
てきました。

今後は、早く飯館村に帰るすうに、除染
を進めてもらいたい。そして、みんなが笑顔
で暮らせるすうにしてください。

私は、あの日の事を今でも忘れません。三月十一日の事です。

当時私は、小学校三年生でした。

いつものように、お家へ向かっているときに地震が来てびっくりしました。その時私は神社の前を歩いていました。

私は、ふと横を見ると鳥居がゆれていてたおれるんじゃないかと思いました。

地震が少しおさまると私のばあちゃんが車で私とお兄ちゃん二人をむかえに来てくれました。

お家に、帰っても地震が続いていました。

やっぱり私がお家に向かっている時が一番地震が強くてこわかったです。

私の通っている小学校は三校合同です、仮設校舎なので夏は暑く冬は寒く大変です。なので、早く飯館村に帰れるようにしてほしいと思っています。

今年で、三月十一日から四年目になります。

162 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 細杉くるみ

3月11日、私は2年生でいつもの通りバス
 でバスを待っていました。毎日のように
 地震が起き、まわりにあんな電柱が一本た
 おれました。とてもこわかったです。近くに
 大人がいなかったため、近頃のお店の人がき
 てくれました。とても安心することができま
 した。

この地震がきっかけで、私たちが家族は福島
 市内の公務員宿舎に引越しました。6人家族
 がマンションに住むとするととてもせまく感
 じてしまい、すべてが初めてだったのでとて
 も不安でした。でも今は引越先の近くにいる
 方々が親切してくれているので、毎日がとて
 も充実しています。

今はまだ私たちが飯館に帰ることができ
 ないですがこの大きな東日本大震災という地
 震があつたことをこれから生まれてくる飯館
 の子に知ってもらい、そして1日でもはやく
 飯館に自然がもどるようになつてくれるだけ協
 力したいです。

163 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 高橋智

東日本大震災が起きる前ぼくはゲームをや
 っていた。しばらくたつとゲタゲタの物
 がゆれてきたので少し不安になりました。そ
 してゆれが大きくなりこわくなって外に歩ま
 した。ばあちゃんは、少し遠にいたのでばあ
 ちゃんの家へ走って行きました。と中家のか
 ら音が落ちてきて家がこわれると思いました。
 そしてばあちゃんに話して家に入ろうとした
 けど物がじゃまて入るのに苦労しました。電
 気も使えなくなり、と夜を過ごしたのでたいへ
 んでした。水は使えただけで飲むことはできな
 かったのでも、飲んでいました。もう二度
 とこんなことがほしいと思いました。

復興への想いでは、家には津波はこたがっ
 たけれどテレビで写るので家が流された
 人は、とてもたいへんだと思いました。まだ
 、見つかっている人もいるので早く見つか
 ってほしいと思いました。それから放射能も
 出ているので行きたい所も行けないし友達が
 別々なので早くもどして、もらいたいです。

164 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 阿部 幸怜

3	月	11	日	金	曜	日	に	私	は	少	し	お	か	し	な	体	験	を	
し	ま	し	た	。															
そ	れ	は	、	し	ん	さ	り	か	く	る	份	分	か	前	に	家	に	ゝ	
り	た	の	と	、	家	に	入	り	、	さ	う	と	ド	ア	を	開	け	た	が
急	に	家	の	中	か	ら	ア	ネ	コ	ロ	が	と	や	出	て	き	た	の	で
や	、	く	り	し	ま	し	た	。	で	も	あ	ま	り	き	に	せ	ず	に	家
の	中	に	入	り	、	た	ら	、	い	し	ん	が	き	ま	し	た	。		
私	は	、	と	た	ん	に	こ	た	つ	た	、	も	ぐ	り	ま	し	た	。	
そ	し	た	ら	、	ラ	シ	ビ	ガ	ト	お	が	て	き	た	の	で	と	り	あ
え	ず	外	に	出	て	と	た	ん	に	、	ガ	タ	箱	ガ	ト	お	が	て	き
た	の	で	ガ	ス	リ	、	は	つ	た	、	た	な	と	思	り	ま	し	た	。
今	で	は	、	な	つ	か	し	い	で	す	。	で	も	今	思	え	ば		
そ	う	じ	も	さ	く	に	て	き	な	か	つ	た	の	で	い	い	た	と	は
あ	れ	は	う	た	り	な	の	と	前	み	た	り	に	、	そ	う	じ	か	で
さ	た	ら	い	い	で	す	、												
そ	れ	に	、	今	は	、	森	や	村	、	動	物	が	い	い	た	と	村	
に	は	、	無	い	の	と	前	み	た	り	に	、	森	や	村	、	動	物	が
多	い	自	然	豊	か	な	い	い	た	と	村	に	も	と	し	て	ほ	し	い
と	言	う	の	が	復	興	の	1	の	願	い	で	す	。					

165「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐々木 太樹

3月11日にぼくは、バスにのっていました
、バスは、きょうに止まってどうしたんだろう
と思いました。

ぼくがバスをおろるとお母さんがいました
、いつかは、二軒けどきとららなうらうら
と思いました、家に帰るとじしんがおきたの
でびくりました。

今は家に帰りたと思います。

東日本大震災がきた時、私は弟とお母さんと
へやでなわこびの練習をしていました。
その時にへやのかべからへんな音が聞こえて
そくほうもなったのでみんな外に出ました。
初めて大震災が来てすごくこわかったし、び
っくりしました。
てい電にもなってよるは、ろうそくやかかいち
やう電灯などで過ごしていました。
何回もじしんがなってよるは特にこわかった
です。
今は、川俣町で一けん屋を借りて過ごして
います。
かっている犬も前は、外にいたけど今は家の
中でかっています。またじしんが来た時一緒
にひなんできるようにぬる時も一緒にぬてい
ます。

震災にまつわる体験

震災から三年九月、ぼくたちは合川侯町にある仮設の校舎で学習しています。飯射村の箕野・飯穂・白石小学校三校合同で勉強しています。ボクは蓬莱のメンバーに、子どもの朝6時42分に夜をこえ、雨が降るとじゅうたいになります。ヒドイ時は学校にフクのは10時30分おきた。帰りには兄弟が遊んでいいます。家の周りに知らない人ばかりです。

蓬莱に住んで蓬莱町の夏祭りがありました。おもしろくて楽しかったです。お祭りでは焼きそばを食べました。おもしろい、た。

しんさいがらう年9か月、ぼくたちはいま
 川また町にあるがせつのこうしゅてがくし。
 りしてます。ぼくは白石小学^ででべんきよつく
 ていて、やさしい生先^ををい^て、かえ。て
 なにかしよらけだとかんがえてテレビを見ま
 した。おれ^はあ^{んな}とテレビを見^て、ま^るい^き
 ころじしんじょうほうがパッとしてま^るこ
 ち来てすばやくにげました。中^がおさま^っ
 たら、家の中を見ていたらほやかみ^どど^が
 がチャチャに音がま^るた。またすこ^し
 中^があ^ったけど、こ^のち^て家^にち^がよ^れま^せ
 り^でした。車^のが^ソソ^ニは^ほと^んど^とく^ま
 て^いました。じ^いち^{ゅう}の^バス^にの^って、ひ
 な^んく^ました。夜^にだ^ら食^べ物^はち^よっ
 と^いが^あ、た^けど、あ^るとし^ん人^もあ^って^あ
 る^なか^った^です。バス^には^テレ^ビが^あっ^て
 た^すか^った^です。

169

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 早川 千尋

東日本大震災が起きた時、私はまだ2年生
でした。
学校から帰って来て、宿題をしている時、机
や家具などがたまたたかれました。テレビや電気が
消えました。
私と母と姉と祖母は、急いで外に出ました。
「なんで急にこんな大きな地震が？」
私はそう思いました。
こんなに大きな地震は生まれて初めての事な
ので、私はこわがたです。
それから4年近くたち、もう震災の記憶は
あまり残っていません。
でも、震災時の生活や思いは強く残っています。
これから、私達の次の世代の人に震災の
おそろしさを教えてもらいたいです。

(20文字 × 20行)

170 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 神代 倅大

あの時僕は、家で宿題をやっていました。
 家には、まだ幼稚園に通っていない妹と、祖
 母がいました。急に火災ほうちが鳴り始め、
 家がゆれ始め、テレビの電源がまれました。
 ものすごくゆれでした。祖母は割れ物が落ち
 ないように守っていました。しばらくして、
 祖母から外へ出るという指示出て、外へ出ま
 うとしましたが、妹はこたつの中に入ってい
 ったので、引っ張り出して外へ連れ出しまし
 た。外から見ると、家はものすごくゆれてい
 るのが見られました。僕は地面を見ました。
 地面までもが、ものすごくゆれていました。
 僕は、たいした地震へのきょうふ心はないけ
 ど、もし津波がおこったらなんて考えるとち
 ゃってこわいです。もう二度とおこってほし
 くない出来事です。

復興への想いは、1日でも早く行くえ不明
 者が見つかることと、がれきて、きよ、放射
 線のえさようです。

171 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 高橋 ひな子

ど	し	ん	が	あ	、	て	何	日	か	た	、	て	学	校	に	行	く	よ	
う	に	な	た	と	き	に	、	犬	を	あ	ず	け	る	よ	う	に	な	り	
ま	し	た	。	私	は	、	あ	ず	け	る	所	に	は	い	な	い	で	学	校
に	行	、	て	い	ま	し	た	。	お	母	さ	ん	か	ら	聞	く	こ	ゲ	ー
シ	に	犬	か	い	れ	ら	れ	る	と	き	い	や	か	、	て	行	き	た	く
な	い	と	い	、	た	そ	う	で	す	。	そ	れ	を	聞	い	て	悲	し	く
な	り	ま	し	た	。														
私	の	所	は	、	津	波	は	な	く	て	亡	な	る	人	は	い	な	か	
、	た	け	ど	海	に	近	か	、	た	人	た	ち	は	す	こ	く	悲	し	い
思	い	を	し	た	と	思	い	ま	す	。	前	ま	で	あ	、	た	町	に	は
も	と	せ	な	い	と	し	て	も	、	町	を	つ	く	る	こ	と	は	で	き
る	の	で	早	く	前	の	よ	う	に	に	ぎ	や	か	に	も	と	、	て	ほ
し	い	で	す	。															

172 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 石川 萌

3月11日、その日はいつもと違って帰るの
 すが、車で帰りました。家に帰ると地震が起
 こりました。いつもと同じくらいだろうと思
 っていました。でも、今回はちがいに上に置い
 てあった大きい物がたおれたくらいの強いゆ
 れでした。その日から、3日間ぐづい、電
 気がこない生活になりました。でも私は思
 いました。電気がこなくなると大切な事を改め
 て思い知りました。

3月を終わりに、4月の中旬、飯館村に計画
 的に住みかきいきに指定されました。その時私
 は、なんでこの家をはなれないといけないの
 そう思いました。ひなにしたのは6月ごろで
 した。

そして今に至ります。いろいろな体験をし
 てきたら、下されば帰りたいと思っています。
 ひなはまた何年か増えたばかりですが、も
 う、どこにも原発を作、てほしくないと思
 うし、早く、復興していったほしいです。

(20文字 × 20行)

東日本大震災があった3月11日、私は、公
 文にいました。公文で、勉強をやっていたら、
 とっせん、となりの机の上に置いてあったプリン
 トがおちてきました。おどろくあまり、外
 に出る、数分たつと、おはあちゃんも家から
 妹と犬を乗せて公文に来てくれました。それ
 から、お母さんも仕事から公文に来ました。
 そして、そろばん教室にいた兄を乗せて、家
 に帰りました。
 家に着いても、車からおりず、家の前に止
 まっていました。とてもこわかったです。
 夕方になると、いここが来ました。いつも
 は、通学に車と自転車の両方に乗るのに、その
 日は、ママのお母さんが泣いていました。
 夜ご飯は、カップラーメンでしました。私は、
 あまりカップラーメンを食べたことがありません
 でした。
 今、私は、毎日みんなが笑顔でいられたら
 復興への道が、こいふと思いません。みんなが
 笑顔にな、こいふです。

174 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 伊東 琴美

私は震災がおきてちがう町へ移り住んでいる
 けれどなかなかその地域の人になじめません。
 村にいた時は、顔見知りの人がたくさんいた
 ので不安には思わなかったけれど知らない人
 がたくさんいると不安に思うことがあります。
 ひなんしたので本当の校舎ではなくかせっ
 校舎になり私は二年間しか本当の校舎にいれ
 ながったので本当の校舎がどんな感じだ、た
 かあまり覚えていないのですごく残念な気持
 ちになります。本当は六年間いれるはずだ。
 たのにもう見れなくなってしまうと思うとと
 っても悲しいです。最後にもう一度だけ見れ
 ればとすごく思います。

私が二十才になるまでにもとの家に帰れる
 ようになっ、てほしいと思います。じょせんさ
 業もまだまだ進んでいないので家に帰れるの
 はまだまだ先かもしれないけれど一日でもは
 やくもとの生活にもどれるといいなと思っ、て
 います。

175 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 入谷 結美

東日本大震災があった時に私はバスの中に
 いました。バスの中はいてバス停に降りよう
 とした時に地震がおきました。地震でゆれて
 いる中きいところと三人で歩いて帰りました。
 帰ると中に電柱や電線がすごくゆれていて、
 家に帰ると、祖父の家の河原が落ちていてそ
 れを祖父と祖母と兄、姉が拾っていて、買
 ったばかりの車は、ガラスがわれ車全部がへこ
 んでいました。東日本大震災の夜は祖父と孫
 母、父はほろろいじょうたいで私の家にはい
 りませんでした。あんなに久しぶりで来たお
 じいちゃんも、おばあちゃんも、おとうさん
 たままで、ストーブやガスの中電灯もつけたよ
 ま一夜を過ごしました。一夜が過ぎたけど
 ついて見てたけれどニュースはながれないで
 Mは、ガソリンにも情報も分りきりしてし
 た。おばあちゃんも、おじいちゃんも分らないま
 まに帰った、みんな帰るよういわれました。
 私はほうし。おとうさんおばあちゃんに帰れない
 ので、おとうさんおばあちゃんに帰りたいです。

176 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 佐藤 由美

私は、3月11日の東日本大震災を受けて、
電気がつかなくな、たことやはげしいゆれが
おそってきた私は、外に出た様子を見ました。
車か前、後にはげしくゆれていて怖か、たで
す。

少しだけテレビがチラチラと映ることもあっ
たけど、これだけ激しいゆれにおそわれて、
とても怖くなって泣き出しました。

望い事さしていたので、お母さんがおかえに
きてくがるのを見て、気持ちかホットしまし
た。

遊びに来ていた車屋さんの友達をいっしょに
いました。

家に帰って、食べ物を食べようとしたけど、
あまり食べ物かなくて残念でした。

また、激しい地震かあったら、ひな人の準備
をして、ひな人所に行って、あいずかあるま
で、様子を見たいと思います。

177 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐藤 安美

3月11日のあの地震から、私の中では何か
 が止まっています。
 クラスの子の笑顔も飯館村にいたころより
 少なくなっています。
 私はあの地震のとき学校にいました。私は
 ビアノの下にかくれました。何度も先生を呼
 びるほど呼んだと三校長先生がこっちだよ
 と言っていますのかわかりました。こちらに出
 ると校長先生が立っていたのでかけよりました
 た。こちらのどあから、外に出ました。
 外に出たから、母が私を待っていました。私
 は泣きながら姉にすがりつきました。そうす
 ると姉はぎゅっとしてくれました。そ
 のぬくもりに安心したのか、その後の先生の
 車でわてしまいました。
 今でも、あの日のことを思い出すと何も考
 えられなくなります。
 今、いろいろな方が福島に来てくれています
 が私たちが何かをしないうちに変わらな
 いと思っています。

(20文字 × 20行)

3月11日ほくほ小学校の帰りのバスのついでに
 いました。ほくがバスから降りるあと少しの
 ところでその「東日本大震災」が起きました。
 ほくは、生まれて初めてこの地震を感じまし
 ました。でもほくは友達の家へ遊びに行こうとし
 ていました。そしたらお母さんがバカじやな
 いのと言いました。ほくはなんぞと思っ
 ました。ラジオを聞くと津波というほくはま
 た知らない言葉がでてきました。今のほくは
 らしいに字ると津波という言葉が分かりました。
 今は福島市に住んでいますが、普通の生活が
 すがほくの学校は仮設校舎なので普通の学校
 となにかがたりません。でも学校生活は変わ
 らないのが楽しいです。
 今後進んで未来は、飯館村もそうだがちが
 う市町村の除染も大事だがと浜通りの津波の
 つめめとが残っているがしきを片付ける復興
 も大事かと思えました。

 2
 2010.9.12

あたしが東日本大震災の体験は色々な心配
 事です。例えばなみで家は流れないが、こ
 れからどうすごしていくのがまた年長の秋
 には分かりませんでした。しばらくしてから
 少しの間家族がバラバラになり仙台と階山に
 分かれて住むことになりました。けどもっと
 遠い本場の鹿島と山梨の申府になんしてい
 たのですごくさびしかったです。とき山梨の
 人たちの様々なしえんのおがげで元気になる
 ました。そして鹿島に帰る時のみんなの手紙
 はすごくうれしかったです。
 鹿島に帰ってきてからはふっこのためしえ
 んぶっしをたくさんいただきますごくうれしか
 ったです。そしてまたハ人家族にもらった夢
 がなによりもうれしかったです。そしてこれ
 からも友達や家族と元気にして支えんをくら
 いたんへの感謝をおすねないよう、そして二
 度とこのようなんんさいのないことを願てみ
 んなで元気に明るい日々をおくりたいです。
 そしてこのけいけんは一生わすれません。

180

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 高橋 励奈

しんさい直後、わたしの住む町南相馬市は
 ほうしゃのうという目に見えないとてもこわ
 いものにおそわれました。たくさんの人達が
 ひなんしなくてはいけないじょうきょうにな
 り、わたしも住んでいた家をはなれ、家族バ
 ラバラの生活を送りました。とても悲しく、
 つらい思いをしました。そういう思いは、全
 体したくないと思いました。今は、ひなん先
 からもどり、家族いっしょに住んでいます。
 でも、ほうしゃのうというものはなくなら
 なくて、わたし達を困らせています。例えば
 水、お米、野菜などわたし達が食べる物、学
 校や家での生活すべてに気を付けなければい
 けません。そして、ほうしゃのうが多く、ま
 だ家に帰れない人がたくさんいます。
 いつか、この町からほうしゃのうがなくな
 り、しんさい前の元の生活にもどればばいい
 かと、心から思っています。

181 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 蒔田 理紗

わたしの、東日本大震災の体験談は、ようちえんの時に、家に帰ってあそんでたらきゅうにじしんがなり、ビュクリしました。そして、のってたまま、ジーと止まるまで、まっっていました。そして、止まったと思ったらまた、きゅうに、な、て、いろいろな道具があって、おもいかエルか、たおれてそのままにして、始めいのちをさいしょに、まもらないかと思いました。みんなにじしんだよと、言いました。そしてビニールシートをもらって、そこに、すわっていました。

つぎに、ふっこうへの想いについて書きます。つなみで、家がなにかされたじゅうみんの人、ひなんしてる人想いをったえます。つたえたことは二つあります。

1つ目は、家を建てるにも、お金はかかりますが、がんばって、のりにえてください。

2つ目は、じしんで家がなくなっから、かせつにすむことにな、てっらいと思います。けど、がんばって、生活をとめてください。

(20文字 × 20行)

私たちが住んでいる日本では、2011年
 3月11日に、東日本大震災という、とても
 大きな地震が起こりました。その地震の影響
 で、まだ2年しか通、ていなか、た須賀川市
 立第一小学校の校舎が崩れ、校庭にははみびが
 入り、その校舎はもう使えなくな、てしま
 いました。なので、1・2・3年生と4・5・
 6年生で分か、他校の教室をか、りて勉強し
 ました。私は、その時3年生で、須賀川市立
 第二小学校をお借、りしました。家から二小ま
 での距離も遠く、道もあまりわからず、大変
 でした。でも、みなさんが協力して仮設校舎
 を造、て下さり、そこが第一小学校となりま
 した。その校舎は、並木町に造、られました。
 しばらく経、て、遊具も出来上がり、みんな
 で遊べるようになり、ました。他の学年の人達
 とも遊べるようになり、ました。そして、学校
 に行くのも楽しみになりました。今は、前の
 校舎をこ、ゆし、新校舎を造、ています。その
 学校も歴史長く残、るとい、いなと思、ています。

103

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 大平 健太

ぼくは、平成二十三年三月十一日の東日本
 大震災の起きた時に、学校のろくかにいまし
 ました。始めはドズかゆれ、かたかたという音を
 たてていました。その時はすき間風だとおも
 っていました。余震でした。その後すぐに
 地震が起きました。本だながたおれ、がラス
 がひめいをあげていました。非常ベルが鳴り、
 ぼくは先生の指示をきくと、昇降口めがけて
 走りました。校庭に出るとすぐに並ばせられ
 ました。その時、ぼくの目に映ったのは壊れ
 た校舎でした。その後、ぼくたちは校庭で待
 機し、親に家へつれて帰ってもらいました。
 家の中は本だながたおれ、水、電気が止ま
 っていました。
 校舎は解体が終わり、けんせつに入りました。
 しかし、東京オリンピックの準備で遅れ
 ています。
 家が壊れ、仮設住居でくらす人々のために
 も、少しでも早く復興にかを入れてほしいで
 す。

18 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 菊池誠貴

ぼくは、3月11日の東日本大震災を体験し
 ました。そのときは教室にいました。だから
 らそのときに、学校がとずねていたら、ぼく
 は死んでいたのかもしねませんでした。
 東日本大震災の被害で、フナミが岩手県や
 宮城県にきて、多くの人々の命がうしたわれ
 ました。
 多くの店などがうなみにながさねてしま
 りました。
 店もたかさねてしまった人は、ちがう場所
 に店をたてて、えいびょうをうています。
 東日本大震災の1日後に、福島第一原発が
 爆発して、ほまじりのほうから、中通りの
 方へと放しゅうが、きました。
 中通りのちかしの町にすんでいた人々が
 までも、仮設じゅうたんにすんでいます。
 なのて、ほやくほうしゅうがすねたね
 てほしゅうと鬼りました。

私はあの東日本大震災を小学校2年生の時に体験しました。毎日毎日「復興」「復興」とばかり言っているけど、本当に復興しているのか、そう思いました。復興は、とても難しいと思っていたからです。でもその考えは間違っていました。もう、あの日から、4年になろうとしています。しかしなお、人々は協力し助け合って生活をしています。それが「復興」だと思います。最近では、大震災のいきょうで自殺してしまう人がいます。それをなくすために、みんなと楽しくお話をしたり、協力しあったり、大震災が起こる前と同じように楽しく暮らすこと、もうこれが復興なんだと思います。これからも、福島県が、復興して笑顔たくさんの方の県になってほしいと思います。

186 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 加藤 紉来

3月11日東日本大震災。あんまり大きな地震
 が起き、まだ二年生だった私ほんとでもおど
 りました。学校は壁にひびが入り、校庭は
 地面が割れているのを見て「父や母は大丈夫
 なのか。家は大丈夫なのか。」と心配でした。
 母が迎えに来たときは、いろいろな気持ちが入り混じって涙があふれてきました。
 父は仕事から、災害の支援活動をするため
 ほとんど帰ることはできなくなりました。ため、私
 達は次の日からしばらくの間祖父の家で過
 すことになりました。水がでなかつたため、
 1日に何度も給水に行ったり、食料を買いに
 行っても行列ができていてお店に入っても、
 棚には品物がほとんどありませんでした。そ
 んな中、父の友人がたくさん食料を送ってく
 たり、私は人の温かさを強く感じました。
 現在六年生になった私は、公園の仮設住宅
 を見ると完全に復興していないことを感じ、
 公園が「公園」として使用される日が1日でも
 早くくることが強く願っています。

187 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿 氏名 伊田 ようか

東日本大震災から、3年たとうとしていま
 す。当時2年生だ、た私は、4年生からマー
 チングを始めました。震災で校舎と体育館が
 こわれてしま、た私達マーチングバンド部は
 練習に使う体育館がなく、近くの中学校や泉
 崎村や岩瀬、長沼の体育館を借りて練習して
 きました。その時は、多くの保護者の方々に
 楽器の運搬人や送けいを協力してもらいまし
 た。今年度にな、て、仮設校舎のそばに、市
 の体育館ができ、優先的に使わせてもら、て
 います。私はず、と保護者の方々に指導して
 下さ、た先生方に感謝の気持ちを持、て練習
 してきました。結果が出なか、た時もありま
 したか夏の暑い中の練習や講師の先生の厳し
 い講習を経験できた事は、これから私の自信
 になると思います。だから今の4年生や5年
 生にもつらくても練習をがんば、てほしいと
 思います。それがいつか学校の復興につなが
 っ、ていくといいです。

188

「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 中川 莉央

東日本大震災																			
															中川 莉央				
私は、2011年3月11日、東日本大震災を経験しました。あの時、私は学校から出て帰る時でした。身動きがとれないほど揺れて、すごくすごく怖かったです。少し揺れが落ち着いてから、校庭に行き、全校生が親を待っていました。私は、待っている時、祖母、母、弟などのいろいろな家族が心配でした。だんだん、地震のまようえいよりも家族の無事の方が心配になってきました。それから、少したって、母と祖父様来て、全員無事だということが分かりました。																			
地震は、まようえいだけでなく、人の命までもうばってしまいます。なので、私は地震で亡くなってしまった人の分も精一杯生きていきたいと思いました。																			

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 柏原美味

東日本大震災を経験して
 柏原 美味
 平成二十三年三月十一日、あの日東日本大
 震災がおこりました。私はその時二年生でし
 た。地震がおこりはじめたころ私は昇降口の
 外に出ていました。まだ他の学年、クラスは
 校内にいました。その直後校舎の壁がおちて
 きたり校庭が地割れしたりして、とても恐が
 ったです。ですが私の学校の被害よりもひ
 どい県がありました。それは、宮城県です。
 宮城や岩手には津波が来ました。津波での死
 者、行方不明者が最々多かったです。のが宮城県で
 す。福島県でも、津波、原発と色々な被害が
 できました。
 私が、この東日本震災を経験して、考えた
 ことは、まだにまだに苦しんでいる人もいる
 ので少しでも力になれることはあると思うの
 で復興に向けて一歩一歩進んでいきたいと思
 います。

私は、小学2年生のときに震災にあいました。その時、私は教室で帰り準備をしていました。「あ、地震だ」と思ってからすぐに、いつもと違う感じだと思いました。すると、先生に机の下にかくれるように言われ下にかくれました。でも、すごくゆれてすごい長い時間に感じました。私は、ものすごく怖くなり泣いていました。その時、放送が流れて、校庭にひなんすることになりました。泣いている私の手を先生がにぎってくれ教室から出ました。廊下にも先生が立っていて私達を守ってくれていました。ガラスが割れたり、ドアが倒れたり、「学校が壊れろ」と思いました。校庭に出ると、学校が壊れろいって本当に死ぬ思いをしました。福島県では、原発問題もあって、復興には時間がかかると思いますが、少しずつですが、私の周りでも除染が進んでいて、前のような生活が戻ってきています。福島は、良い所です。たくさんの方が遊びに来てくれるとうれしいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐藤 奈月

東日本大震災の体験談と復興への想い

佐藤 奈月

私が東日本大震災を受けて、思ってたことは「こわい」ということです。この日、たま

たま帰るころでした。帰ろうとした瞬間に地震が起きました。私の学校はコンクリートだ、たまたまコンクリートの柱が落ちてた

りしてしまいました。危険なので外へ出ると、地面が割れ、遊具もバラバラに壊れていました。

地震は何回も来て、しりがんだりは何回もくりかえし、お母さんがおかえにくると泣いてしまいました。今は、仮設の学校です。ここを楽しいです。しかも、大きい地震はまだ来てほく、ここを安心です。まだどこかは、仮設住宅の所もあるもので、今後、放射線が少なくなると、たまたまたまた自宅へとまどかると思いますが、今のところ、二本からを、しりごとほしいので、そういっていきます。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 武藤 潤哉

東日本大震災と復興

武藤 潤哉

平成二十七年三月十一日の学校から帰るところだ、た。大まがゆれとともに、校舎がくずれていくのを見た。周りには、泣くみもいた。

須賀川市は中通りだ、たので津なみの心配はなかつた。だけど、ニュースを見て津なみと地震のこわさを知りました。

校舎がこわれたので三年生の一学期は二小に二学期からは仮せつ校舎にかよいました。

原発事故から約四年たつのに除せんが終わてないところがたくさんあるし、早く復興してほしいです。

ぼくたち一人一人にできることをやつて、一早く復興をして、とりもどしつある日常を完全にとりもどしたいです。

193

「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 二瓶 愛梨

あの2011年3月11日の「東日本大
 震災」がおきた時、私は小学2年生で、ちよ
 うど学校から、家に帰ろうとしていた。下校
 の時間、教室から出た時でした。
 私はまだ2年生だったので、地震がおきた
 時、どのような対応をすれば良いかわかりま
 せんでした。そんな時に、校舎の壁がはがれ
 落ち、校舎は壊れ始め、私は不安と恐怖しか
 ありませんでした。私や、私の友達が泣いて
 いたら、先生が私達を外まで誘導してくれて
 くれました。そのときは、皆無事に家に帰れたので良かった
 です。でも、その後の生活は、水も電気も
 使えず、あたり前だ、た日々の生活ができな
 く、とても大変でした。
 私の周りには、震災前に住んでいた家に、
 一生戻れない人がたくさんいます。仮設住宅
 ではなく、前住んでいた市町村で、前住んで
 いた、大切な思い出がある家で、国民全員が、
 安心で、安全に過ごし、暮らせたら、それは
 私達にとっての一番の幸せだと思います。

ぼくが二年生の時の下校と中、6強の地震
が起きました。せまい道路のところだ、たの
でしゃがみました。地震は1分間は続いてい
ました。終わ、たら急いで家に帰ろうとした
らお母さんが車で迎えに来たので乗りました。
家に帰、たら、かわらが落ちていたのてび、
くりしました。家族が全員帰、てきて、テレ
ジを見たら、全部の番組が、地震のことなの
ておどろきました。途中途中に余震が起きて
いるのて、怖か、たてす。いわきのところの
色が黄色てした。赤色てはなか、たのてよか
たてす。そのまま一日が過ぎました。
それからしばらく同じぐらいの地震が3回
起きているのて怖か、たてす。3年生になっ
てから、沖縄に避難しました。沖縄は
強い地震も起きず、幸せてした。帰、てきた
ら、もう地震は起きていなか、たのて東日本
大震災はもう終わ、たと思いました。もうこ
れ以上強い地震は起きてほしくないてす。

ぼくは、震災の時学校にいてみんなび校庭に
ひな人をしました。そして、校庭から見た校
舎は、かやがくすれ落ちて鉄骨がむき出しに
なっていて、ガラスが割れていました。その
後家に帰ると、皿が割れていたり物が散乱し
ていました。テレビをつけると、津波
の映像が流れていました。それを見て、悲し
い気持ちになりました。今では、もう復興の
テレビの方が多いですけど、この震災は、忘
れていけないと思います。ぼくは、この震
災をきっかけに「地震はマア」と思いました。
ぼくのいとこは、放射線が心配で外出しな
くなりました。ぼくは、もうこのようなこと
がおこらなければいいなと思います。震災か
ら原発の事故まで起きてしまったので、原発
に反対する気持ちも強くなりました。早く、
何の心配もない日本になってほしいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 圓谷 紗羽

二〇一一年三月十一日地震が起りました。
 その時私は二年生でした。地震が起きた時は
 先生と大よほらをし、帰ろうとしている所で
 した。地震でみんな慌てていまして、先生
 の指示で教室に避難しました。しかし、教室
 も地割れし、泣く子もたくさん出てきて、私
 も家の人がお迎えに来るのを待ちました。よ
 うやく、家の人に来て安心していましたが、
 家の中はくちゃくちゃ、おはあちゃんに会
 ったんに大量の涙が溢れました。
 しばらくして、落ちついて来たころ、おは
 あちゃん家や東京のいとこの家に避難したり
 もしました。そして、交通機関が復旧し、習
 っていたバレエもまた通えるようになりまし
 た。あれから4年が、今でもバレエを続け
 ています。東日本大震災で笑顔を失った人も
 たくさんいます。その人達に笑顔が戻ること
 を願います。

震

197 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 渡辺華以

僕達の学校は、この日に地震でくずれました。校庭は、二つに割れていました。僕は、その時、インフルエンザで学校にはいませんでした。家で、母に見せてもらった写真が、しょうげき的でした。後日からは、おばあちゃんの家にとまることになりました。いとこの家族もい、しよじした。学校がくずれたことで学校にも何ヶ月かは行けませんでした。授業が再会しても一校舎ではなく二小での再会でした。二学期からは、本校舎ではなく、仮校舎で不安ばかりの生活でした。僕達は、新校舎に入れないまま卒業しますが、旧校舎にはいられたのでくいはありません。

(20文字 × 20行)

私は、東日本大震災がおきたとき、2年生
 でした。下校しようとして友達と教室をでました。
 すると、いきなり大きなゆれが私達をおそい
 ました。目の前の教室のとびらや、トイレの
 とびらが激しく開閉してしまいました。横の方の
 かべは、はがれていました。担任の先生が、
 「早くしゃがみなさい」とさけんでいました。
 私と友達はとてまこわく、死んでしまうとい
 う恐怖しかありませんでした。校庭は、地
 震で、今までの光ばいや自分が勉強、持設
 をしていた学校は、使えなくなりました。
 私はあの震災の後、今までよりも、と命に
 ついて考えるようになりました。
 私は、できるだけ早く、大好きな日本が復
 興することを願っています。また自分にでき
 ることはしていきたいです。

あと1週間で春休みという日のことでした。
とっ然、窓がガタガタして、少し様子がおかし
しいと感じ、ろう下にかざ。てある額縁から
はなれました。放送で「地震だ」と告げられ
近くの友達とれくな。て、ランドセルで頭部
を守りました。しばらくゆれにたえていると、
ゴゴゴゴ...と音がして、遠くの柱がくずれま
した。先生が来て、校庭にひなんすると、校
庭が半分無くな。ていました、何が起きてい
るか全く分かりませんでした。校舎も、かべ
がはがれおろ、もう通えなくなりました。
まさか学校に通えなくなるとは思。ていな
くて、これからどうすればいいのか見当もつ
きませんでした。それから3年の1学期は二
小に通い、2学期からは仮設校舎でしたが、
私は2学期から一時ひなんしたので、その時
の様子は分かりませんでした。今は仮設校舎
でふつうに生活できていますが、もう地震の
ことは思。出したくありません。

200 「東日本大震災の体験談と復興への想い」 応募原稿

氏名 橋本瑞希

2011年の3月11日、当時2年生だ、
た私は、生まれて初めて大地震を体験しまし
た。その名も「東日本大震災」です。私の学
校は古く、校舎のかべははがれ、校庭は地割
れをしました。2年生の私はどうすればいい
かわからず泣いていました。家に無事に帰
たら、机のたなにあ、た教科書などは全部床
に落ちていて、キッチンにある食器も割れて
しまっていました。食料を買うために歩いて
いくと、カップラーメンとおにぎりがらしいし
か売、ていませんでした。ガソリンも値段が
高いのであまり車も使いませんでした。
2015年現在でも震災の傷跡が残、てい
る場所があります。テレビでは、今だに行方
不明の家族や友人、ペットを探している人達
がたくさんいます。地震は、時によ、て牙を
むき、人間の大事な命をうばい去ります。今
現在、私達が出来ることは、復興への行事に
参加し、募金に協力し、復興を願うことです
が、他にもできることがあ、たら参加します。

(20文字 × 20行)